

【書評】



書評

日本音響学会編
音のなんでも小事典
 講談社 ブルーバックス B1150
 ISBN 4-06-257150-1

評者：NTT基礎研究所 東倉洋一



本書は、日本音響学会の創立60周年を記念する出版事業の一環として企画されたものである。評者も6名の執筆者の一人であるため、通常の本評とは異なり、本書の紹介と出版後の感想と反省を述べてみたい。

皆さんに音の世界の「扉」を開いていただくのが、本書の目的である。そして、この扉を通して、科学技術への新たな好奇心を抱くだけでなく、さらに自然、人間、社会への興味と理解につながっていくことを願った企画である。ちょっと耳を澄ましてみよう。今まで気にとめていなかったというだけで、私たちのまわりには、たくさんの音の世界が広がっていることがわかる。日常、こんなに多くの音に囲まれながら、なにげなく接しているために、音は、まるで空気のように「あってあたりまえ」の存在になっているのである。

生物にとって、音は生存に欠かせない情報である。私たち人類も、最初は、他の生物と同じように、音を聞いて獲物を追い、音を聞いて敵から逃れたであろう。しかし、ことばと道具の発明が、人類にとっての音の歴史の新しいページを開いた。音声生まれ、音楽が生まれ、音のコミュニケーションの新たな時代が始まった。さらに、産業革命を経てハイテク社会に至る科学技術の進歩は、音の爆発的な増加をもたらした。聞こえない音である超音波をはじめ、音の利用技術も急速に発展してきた一方で、

騒音問題など、音が引き起こす社会問題も増加してきた。このように、私たち人類は、よくも悪くも「音」と切っても切れない関係にあり、未来永劫に「音」とともに生きる存在なのである。

本書では、私たちのパートナーともいえるこの「音」への誘いとして、80の項目を取り上げている。一項目ごとの読み切り構成なので、興味あるページから読んでいただければよい。本文中に参照項目を示すことによって、興味の赴くままに関連項目をたどれるように配慮した。音が身近な存在だけに、日常体験に照らし合わせてなるほどと思うこと、そうだったのかと今までの疑問が解けること、そんなことがあったのかと驚くことなどを通して、知らぬ間に音への理解が深まっていくことだろう。

第一章は、音の知識として親しみやすい項目のアラカルトで構成した。

第二章、第三章には、私たちの知的活動に深くかかわる音である音声と音楽を取り上げた。たとえば「音声の科学」の章では、「顔から声を復元できるか?」「動物の声と人間の声はどうちがう?」「プロの声はどう違う?」と読みすすめば、声を出すためのさまざまなくみを自然に理解できるよう工夫した。

第四章、第五章では、「電気の声帯 — スピーカ」などの身のまわりの音技術にはじまり、「音を音で消す」「音の

スポットライト」「音の望遠レンズ」「音のバーチャルリアリティ」「聴覚レーダーが視覚を助ける」「会話を自動通訳する！」といった音の技術の最先端へと読みすすめば、音への好奇心、音とともに生きる喜びと夢が未来に広がるに違いない。

「理解を深めるための最終章 音って何だ？」には、音の基礎知識（音の物理、音の生理・心理）として、必要最小限の内容を盛り込んだ。読みすすむ中で疑問が生じたとき、また、各項目に関連する基礎知識の手引きとしても役立てていただくための章である。

本書の執筆には、出版の目的とブルーバックシリーズの性格を考慮して、「わかりやすく」「興味深く」「科学的にしっかりした内容」という視点で臨んだ。出版後に寄せられた感想では、音響学会の会員からは、総じて「わかりやすい」という評をいただいた。しかし、科学評論家や新聞記者の方々からは、「まだまだ難しいところが多いですね（自分たちに任せてくれたらもっとわかりやすくなる）」といった率直な評をいただいた。科学技術を専門とする者にとって、「専門のことばでしか語れない」症候群から抜け出すには、より一層の努力が必要なのである。

音の知識には、「百聞は一見」ではなく、「百見は一聞にしかず（Listening is believing）」という項目も多い。と

くに、第二、三章の音楽や音声の科学における「存在しない音も聞く脳の働き」「一人で歌う二重唱」「無限に続く音階」などは、その典型例である。これらは、音のデモンストレーションが是非とも欲しい項目である。

さらに、視覚と聴覚の融合現象を扱った「目で聞く音」では、画像も加えたマルチメディアデモンストレーションが欲しい。しかし、残念ながら、今回の企画は、従来型の印刷メディアによる情報発信に留まってしまった。今はすでにマルチメディア時代であり、技術的な障害はほとんどないため、CD-ROMやインターネットによる出版が一般的になるのも時間の問題であろう。

本書の出版後約6ヵ月が経過した。4月の第3刷の発行で、発行部数が2万6千部となった。通常の専門書の発行部数と比較して、一桁多い部数である。また、諸先輩、研究仲間から一般の方々まで、非常に多くのご意見をいただいた。総じて好評であり、できるだけ多くの読者の「音への理解を」という企画が成功したことは、日本音響学会、筆者一同の喜びとするところである。

「音」はVRにとっても重要な要素である。本書が、日本バーチャルリアリティ学会会員の皆さんの音への興味と理解への一助となれば幸いである。